

## 「参議院選挙」

2016年07月12日

参議院選挙の結果が出た。自民・公明の政府与党は改選過半数を確保し、与野党の改憲勢力を加えると3分の2を超えた。安倍政権の勝利である。しかし、今回の選挙は極めて低調であった。何が選挙の争点であるのかが明確でなかった。メディアも東京都知事選の立候補者報道に熱心で、党首間の論争もほとんど聞けなかった。投票率が54.7%だそうで、国民の半数が政治に無関心であった訳である。投票しても何も変わらないということであろうが、政治は国民生活に直結していることを知るべきである。

安倍政権は「アベノミクス」を問う選挙と位置づけていた。公約であった消費税10%のアップを延期し、アベノミクスの経済政策を強かに押し進めると言っていた。金融緩和と年金を株に投資し、株価を上げ、円安に導いた。大手企業は大きな利益を得た。その利益が下に滴り落ちるトリクルダウンが起こると言い続けた。しかし、国民の8割が、その恩恵にあずかっていない。むしろ、貧富の格差が広がったと感じている。それでも、安倍政権を支持した訳である。消去法で、他の政党に任せられないということであろうか。

安倍首相は、自分の任期中に憲法を改正したいと公言している。今回の選挙公約では、目立たない下の方に、隠すように書かれていたが、安倍首相は国民の信任を得た、公約していたと、改憲に向かうのではないか。民進党、共産党、社民党、生活の党の4党は改憲を阻止するため共闘を組んで闘った。この共闘は歴史的な意味を持っている。殊に、共産党が自前の候補者を出さず、野党共闘に加わったことは驚きであり、評価できる。32の一人区で、野党共闘は11議席を獲得した。共闘しなければ、野党はもっと惨敗したのではないか。公明党は「平和と福祉」が立党の理念であったが、自民党に全くすり寄ってしまっている。創価学会員は至るところで公明党批判をしている。四谷の創価学会本部前で、前代未聞の抗議行動を起こしているというから、彼らの怒りが見て取れる。

沖縄では、辺野古基地建設に反対する伊波洋一氏が、沖縄北方担当大臣の島尻あい子氏に圧勝した。沖縄に行った時、島尻氏のことを「島唄あい子」と皮肉り、選挙に勝たせないと言っていたのを聞いた。沖縄県民の基地建設反対の声を、今回も明らかに示した。福島では、法務大臣の岩城光英氏も、民進党の脱原発を訴えた増子輝彦氏に敗れた。原発事故復興に厳しい審判を下した。沖縄と福島は、現在の日本の苦悩を負わされた県で、そこで、二人の閣僚が落選したことは、両県民は政府の政策に明確な「否」の意志表示をした。

今回の選挙では、18歳から選挙権を持ったが、それは、どのように反映されたのであろうか。若者たちが声をあげてほしいと願う。

安倍首相は言葉を大事にしない。言葉をどうでもよいことと思っている。集団的自衛権を閣議決定し、それを、国会で強引に法制化した。憲法9条は交戦権を否定しているにもかかわらず、自衛隊を他国に派遣すると言う。憲法の条文をそのままにして、実質的に空洞化した。これは、言葉が無為にすることである。他国に自衛隊を派遣するなら、憲法を変え、言葉と行いを一致させることは最低限、しなければならないことである。言葉の真実が失われる時、人間は心に虚無が醸成され、ボディ・ブローのような打撃となり、文化が徐々に腐敗していく。私は、このことが最も重大なことであると思っている。安倍首相は、憲法審査会で議論して改憲すると言い、同時に自民党は「改正草案」を出していると言う。その改正草案は権力を律する立憲主義をひっくり返したような、国民は国のためにあるとする国家主義を前面に出したアナクロニズムの草案である。断じて認められない。